

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4271401426		
法人名	有限会社 気楽		
事業所名	グループホーム ポテの丘		
所在地	長崎県雲仙市愛野町乙3051番地3		
自己評価作成日	令和 7年 10 月 3 日	評価結果市町村受理日	令和7年12月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/42/">http://www.kaigokensaku.jp/42/</a>
----------	---

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	令和 7年 11 月 5 日

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

気持ち穏やかに過ごして頂けるように心がけている。家族様が此処に入所させて良かったと思ってくださるよう努める。色々な認知症の症状を理解しながら支援していく。看取りをする上で人間として誇りを持ち自分らしく又家族様の気持ちを汲み取りながら最終を迎えて頂くように努める。地域の方が何時でも相談しやすい雰囲気作りをしていく。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは、大切な身内の介護をきっかけに管理者が実家のジャガイモ畑を利用してホームを建設し設立したものである。“気持ち、穏やかに楽しく過ごしましょう”という理念の下、職員と話し合い、“私のことを分かってくれる人と一緒にゆっくり過ごしたい”など、入居者の思いを介護目標として設定している。長年勤務する職員も多く、信頼関係に裏付けられた理念の共有、実現に向けた道のりの経過が確認できる。地域住民による野菜の差し入れや地区清掃、中学生の体験学習の受け入れ等、日常的に多様な交流があり、地域住民みんなが高齢者を大切に、有事の際には助力を惜しまない土地柄である。居室ベッドから転落する危険性がある場合には、床に布団を敷いて生活できるか職員自ら試行し、最善の方策を検討している。最期まで入浴を支援したいと浴室を改装している。職員全員が通夜に臨席する等、入居者一人ひとりのその人らしさを大切に、幸せを願ってケアの実践に努めるホームである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は頭の中にあるが実践につながっているかわからない。心がけながらケアに活かしているが日常は忘れかけているのが現状である。ミーティング等、話し合いをしてケアにつながっていることもある。	ホームは、“気持ち、穏やかに楽しく過ごしましょう”という理念の下、職員と話し合いながら具体的な介護目標を設定している。長年勤務する職員が多く、信頼関係とともに理念が定着している。入居者の幸せ実現を支え、否定的に受け取られやすい言動も人間らしさとして受けとめ、否定せず寄り添っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会には加入しているが、日常的には交流は難しい。清掃活動等には参加している。	ホームは、開設当初から地域に根ざした存在として歩んでいる。近隣6地区の自治会長や地域住民は、高齢者を温かく見守り、助け合いや交流を続けている。野菜を差し入れたり、地区清掃に参加したり、中学生の体験学習を受け入れたり、日常的な交流を重ねている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方からの相談には対応している。運営推進会議や、地域会合では発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年6回運営推進会議を行っている。入居者の様子、評価への取り組み状況等について報告し、意見交換している。	自治会長、老人会会長、地域包括支援センター職員が参加し、農繁期を除く月に年6回運営推進会議を開催している。ホームが活動状況の他、事故や身体拘束等の報告を行い、地域の情報交換の機会となっている。会議開催の知らせはホームだよりに掲載しているものの、出席していない家族への会議内容の報告は行っていない。	ホームの取組や認知症への理解を深める手段として、運営推進会議の内容を出席していない家族とも情報を共有する工夫に期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	何かあれば市担当者に連絡を取り、出向くようにしている。協力関係は築けているように思える。広域に提出する書類がある時は、支所に届けお願いしている。	雲仙市地域包括支援センター職員が運営推進会議に出席し、ホームの現状を把握している。島原地域広域市町村圏組合とは電話連絡や訪問にて業務を遂行し、主催する救急救命研修を受講する等の連携を図っている。更に市の長寿社会課等と協力関係を保っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアについて理解し、取り組んでいる。入居者の状態によっては、やむをえない事もあり、その場合は十分に検討を行い、家族に説明し、届出もしている。	身体拘束適正化のための指針を整備し、年2回以上の研修を実施している。半身が不自由の入居者がベッドから転倒するリスクを回避するため、職員は床に布団を敷く等、安全で身体的負担の少ない方法を模索している。やむを得ず対応が必要な場合は、経過記録をもとに家族の理解を得ており、常に最善の方策を検討し続けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待、身体拘束の研修には参加している。ミーティング時等に情報を共有し防止に努めている。虐待のグレーゾーン等についても話し合い、防止を心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前は、成年後見制度を利用された方が数名おられ、ホーム内で研修したことがある。研修があれば参加している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明を行い、理解、納得をされたうえで、入居して頂いている。改定がある時は、文章を送り承諾を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者の状態を、その都度家族に伝え、意見や要望を尋ねるようにしている。ミーティング時に、職員で情報を共有し、話し合いをしている。	ホームは、入居者や家族の意見や相談を受ける体制を整えており、利用開始時に説明を行っている。職員は、家族の面会や電話、SNS、ホームだよりや写真の提供を通して家族の思いを把握している。家族や入居者の声は、運営に活かしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常に意見や提案を話せる機会を設け、反映させている。	職員は、朝礼やスタッフミーティングに限らず、日常的に意見や提案を積極的に行っている。管理者は、職員の声を丁寧に吸い上げ、運営に反映している。面談やストレスチェックなどを通じて働きやすい職場づくりに取り組み、物品購入や希望シフト、休暇の調整している他、バルコニーの手すりの高さの見直しなど、改善に繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	一人一人に合わせ働きやすい環境を整えるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	必要な研修等を提案し参加させている。資格取得時の勤務調整、研修費用も負担している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	以前は交流する機会もあったが、コロナ禍以降リモート研修が多くなり、同業者との交流はほとんどない。リモート研修の方が受けやすいと思う。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	情報を共有し、同じ方向性を確認しながら、支援するように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が不安なこと、要望などを言えるような雰囲気作りに気をつけて、話をするように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	情報の中から何を必要としているかを見極め、対応に努めている。本人の状況と家族の要望が、あまりにもずれ違っていたりする時もあり、見極めが難しい時がある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	会話の内容に合わせて、時には同じ立場で助け合って生活しているような関係を保ったり、職員として接したりしながら、関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と入居者の間をとりもちながら、日常の状態・様子等を伝えるようにしている。本人もまじえて家族と話しがしやすいようにサポートするように心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の大切であろう事柄を把握して、会話の中に取り入れたりしながら、忘れないよう安心してもらえるように対応している。	本人や家族からの聞き取りやサマリーを通じて、これまでの人間関係や馴染みのある物事を把握し、職員間で共有している。得られた情報をもとに、会話のきっかけづくりや信頼関係の構築に努めている。家族や知人の訪問、自宅や墓参りへの外出、趣味を活かした活動など、本人と馴染みのある人や場との関係の継続を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の状態を把握し、入居者同士が関わり合い、フォローが必要な時は間に入り、混乱することがないように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後も家族の方が訪ねて来られることもある。相談があった場合は対応している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中で個々の思いを汲み取りながら情報を共有し、できるだけ気持ちに寄り添ったケアが出来るように努めている。困難な場合は、相手の立場になり検討している。	職員は、雑談の中から入居者の思いを引き出している。言葉での理解が難しい場合には、わかりやすい表現に言い換えたり、仕草を観察したり、筆談などから本人本位の支援を検討している。入居者の“らしさ”がわかる日々の言動を日報に記し、“ゆっくり起きたい”“部屋で食べたい”といった入居者の希望を支援に活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活状況がなかなかつかめない事が多くなっている。わからない事は、家族等に話を聞きながら把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々コミュニケーションを取りながら、現状の把握に努め、職員同士でお互いの気づきを共有し、日々の変化に気づけるように心がけている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族に要望を聞き、現状の課題を話し合い、又自分の思いを伝えることが出来ない人は、本人本位になるように、介護計画を作成している。	情報提供書やアセスメントをもとに暫定の介護計画を立て、1ヶ月を目途に本計画を策定している。職員は、日報やケアチェック表で、支援目標の実施状況を確認している。家族から得た情報等も踏まえ、スタッフミーティングで全職員が入居者全員のモニタリングおよび評価を行い、6ヶ月ごとに介護計画の見直しを実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を記録に残し、情報を共有して介護計画の見直しに活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	変化に応じて話し合い、柔軟な支援に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源を支援することはできていないが、季節を感じるドライブ等は企画している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期的に往診して頂いており、体調の変化がある時は相談をし、指示を仰いでいる。かかりつけ医との関係は良い。皮膚科等、家族が行けない時は対応している。	協力医による訪問診療を実施しており、事前に入居者の状況や投薬依頼などをFAXで伝えることで情報を共有し、入居者の状態に応じた適切な対応に繋げている。かかりつけ医など他科受診の際には職員が付き添い、家族に受診結果を伝えている。医療機関等の連絡先をリスト化し、24時間医療連携の体制を整備している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	気づいた事は看護師に伝え、すぐに対応してもらっている。看護師との連携は取れている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は家族や連携室と連絡を取り合いながら、早期に退院できるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	話し合いを積み重ねていくことで良い関係を作り、スタッフは、家族の気持ちを汲み取りながら取り組んでいる。	ホーム利用開始時に重度化・看取り対応方針を説明して同意を得ている。医師の説明のもと、看取り開始時に意向の確認を行っている。最期まで入浴を支援したいと浴室を改装している。全職員が通夜に臨席する等、入居者の尊厳を大切にした看取り介護に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練を行っているが、急変時に対応できるか不安がある。繰り返し行う事で忘れていた事などを復習し身につけられるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。 また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	消防署との訓練、自主避難訓練を定期的に行っている。注意点・反省点等を話し合い全員が身につくようにしている。火災など起こさないように気を付けている。	消防署立会いを含め、年2回の災害対策訓練を実施している。BCPを策定、自然災害時には垂直避難を基本として備蓄を整備、自家発電装置を備えている。避難時持ち出し情報シートをファイリングし、非常災害想定連絡網を整えている。運営推進委員にも非常時に備えて入居者情報を伝え、地域での合同訓練も行っている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の状態に合わせた声掛け、対応を心がけている。親しみやすさから、慣れた方言など使っていることもある。	職員は、入居者の人格を大切にし、自立に繋がるような関わり方に努めている。接遇研修を受け、日々のケアに活かしている。家族には写真使用に関する同意書を取得しており、職員についてはイニシャル表記を用いるなど、個人情報保護に配慮している。守秘義務を遵守するための誓約書を整備し、情報管理の徹底に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人がどうしたいか聞くようにしているが、自分の思い・希望を言葉に出せない方には、混乱せず思いを言えるような声掛け、対応をしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人の思いや状態に合わせて過ごしてもらっている。出来るだけ本人の意思に合わせて支援できるように心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一般的な身だしなみは心がけている。散髪、爪切りは定期的に行っている。季節に合わない服を着る方は、その時に応じて対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の行事には、四季折々の食材を取り入れた食事を提供するようにしている。個々の食事形態に合わせている。軽い手作業に豆の皮むきや、テーブル拭き等はしてもらっている。	職員は、入居者の嗜好や旬の食材を取り入れながら、その日の体調や様子に合わせて調理している。咀嚼に配慮し、食べやすい盛付を行っている。入居者が野菜の下準備を手伝えるように配慮し、花見や敬老会、誕生会などの行事では特別感のある食事を楽しめるよう工夫している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人に合わせた食事量、食べやすい形態にしている。食べる量が確保できない方は、補助食で補ったりしている。一日の水分量がとれるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人一人に合わせ口腔ケアをしている。自分で出来る方には、声掛けをしている。義歯の洗浄は曜日を決めてポリデントにつけている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者に合わせた排泄の声掛け、誘導をしている。日中トイレ、夜間ポータブルトイレを使用するなどして個々に合わせ支援している。	日中はトイレでの座位による排泄支援を行い、夜間のみポータブルトイレを使用する等、入居者の習慣を尊重した支援を行っている。排泄支援の状況は生活管理表に記録し、職員は気づいた点を日報に記入している。カンファレンスではパッドの使用方法やサイズ、種類を見直し、入居者が快適に過ごせるよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の把握には常日頃から心がけている。便秘の人には、飲み物や食事等で工夫している。それでも難しい方は薬で調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日は大体決めているが、本人の体調や気持ちを大事にして、入浴してもらうようにしている。しょうぶ湯・ゆず湯にも入ってもらっている。	入浴日は週2回とし、看取り期も入浴を支援している。拒否時は無理せず、日時変更など柔軟に対応している。また、入浴日以外は清拭を行っている。できることは自分で行ってもらう等、入居者の習慣に配慮している。柚子湯や菖蒲湯で、季節や香りを感じられるよう工夫している。入浴の時間が入居者にとって寛ぎとなるよう支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人に合わせた明るさ、温度、布団の調整をしている。夜間安心して眠れるように、雨戸を閉める方もいる。昼間は状態に応じてリビングのベットで休む方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬時には、薬表を見て数・名前・顔を確認し、飲んでもらっている。誤薬がないように気を付けている。目的・副作用までは理解しているか分からないが、すぐに調べられるようにファイルに閉じている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごすように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯たたみ等出来ることはしてもらいながら、気分転換になるような声掛けをし、会話を楽しくしてもらえようように心がけている。一人一人に合った楽しみごとが出来ているかわからない。何をしたいのかわからないのが現状である。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的に外出をする事は難しいが、花見や秋のドライブ等を計画し季節を感じ楽しんでもらっている。デッキや庭に出て気分転換もしている。家族の希望があった時は、その方の体調を考慮して対応している。	普段は、敷地内散歩やウッドデッキで外気浴を行っている。家族の協力のもと、外出や外泊の希望に対応しており、要望に応じて職員の同行や目的地まで送迎した事例もある。病院受診の道中を活用したドライブ、季節毎に蓮や桜見物などの外出を実施する等、入居者の思いに寄り添いながら外出支援に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持っている事で混乱につながるの、家族の了解を得て所持しないようにしている。おもちゃの小銭を持っていた方もいた。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	贈り物や手紙が届いた時には、電話をする方もいる。落ち着きがない方には家族に電話したり、スタッフが代わりに話をする事もある。TV電話で話したり、写真を送る方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花を飾ったり、壁飾りをしたり季節を感じられるようにしている。光が苦痛に感じる方のため、雨戸を閉めたり、カーテン等で対応している。こまめな換気を心がけている。	廊下には季節の飾りやマスコット人形、手仕事が得意な職員による立体折り紙、入居者の笑顔の写真等を飾られ、豊かな色彩で彩られた心躍る場所である。洗面時、鏡面に映ることが気になる入居者のために鏡にカーテンを引く等、共用空間においても個別に対応した細かな配慮があり、居心地よく過ごせる空間である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	落ち着いた過ごせる場所にいてもらえるように心がけている。話しやすい入居者同士隣り合わせで座ってもらうようにしている。自分が思った場所を見つけ過ごしている方もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	TVが見られる方は、TVを設置したり、それぞれの入居者に合わせた居室の空間づくりになるように工夫している。物を置くことで混乱される方は、あえて何も置かない方もいる。	使い慣れた家具類の持ち込みは自由である。手で点滅ができるように電灯に長いひもを付けたり、時間の感覚が不明な方には「今は夜です」など判明できるようなカードを置くなど、入居者一人ひとりの状態に応じた配慮を施している。職員手作りの誕生日や入居者が制作した塗り絵を飾り、安らぎの空間を設えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	出来ることは見守りをして、安全な生活が送れるように工夫している。入居者が通る場所には、危ない所がないか気がけている。		